

# 私のトラウマ “防空壕<sup>ごう</sup>から見た空爆”

大 條 一 郎 さん

毎年、今頃になると思い出す。それは昭和20年の夏、6月22日の朝のことであった。

その日も朝からセミの鳴き声がうるさく、うだるように暑い日であった。不思議と青く晴れ渡った空に突然、「ブーン、ブーン」というエンジン音がかすかに聞こえて来ると同時に空襲警報が鳴り出した。その日、農作業の動員を休んで家にいた私は、またか？と思いながら防空頭巾<sup>(1)</sup>をかぶり、素足にゲタをつっかけて100メートルほど離れた山肌に造った防空壕<sup>ごう</sup>へと走った。壕<sup>ごう</sup>にたどり着くと同時に「ドーン、ドーン」と腹にひびく爆風に震え上がったのを覚えている。

大人の会話から「水島工業地帯（当時軍用機を製造していた三菱重工業水島航空機製作所<sup>びし</sup>＝現三菱自動車水島製作所<sup>びし</sup>）」が爆撃されているということが理解できた。私は湿った薄暗い壕<sup>ごう</sup>の中ほどから、恐る恐る入口へ出て空を見上げてみると、水島方面の空には無数のB29爆撃機（100機以上と聞いている）が、整然と編隊を組んで爆弾の雨を降らせながら飛んでいる。そこには、日本の飛行機は1機も現れず、飛んでいるのはB29爆撃機と護衛<sup>(2)</sup>のグラマン戦闘機のみである。グラマン戦闘機にいたっては、のどかな田舎の集落まで飛んで来て、しかも超低空飛行で私たちの頭上を飛び回り、手を振っているように見えた。それは私にとっては、とても恐ろしい、そして悔しく悲しい光景であった。今、思い出してもゾツとする。我が頭上は敵機のみとは。

一方、高射砲陣地からの砲弾は音だけはしているが、敵機には全然届かず、遥か<sup>はる</sup>下方でパンパンとはじけて落下して来ている。その様子を見て、目の良くない年配のおばあさんは、高射砲の弾が敵機に命中し敵機がバラバラになって落ちて来ていると思い「勝った、勝った」と手を叩いて<sup>たた</sup>喜んでいる。その姿が自分にはとても悲しく涙が止まらなかったのを覚えている（なぜならば落ちて来ているのはB29爆撃機からの爆弾だけ

ら)。本当に悔しく悲しい一日であった。

“鬼畜米英” “撃ちてし止まん” “欲しがりません勝つまでは” 等々の精神論と竹やり<sup>(3)</sup>では戦争にならない。この日も水島工業地帯では、学徒動員<sup>(4)</sup>を含めた多勢の方々が亡くなられたと聞いている。

この空爆で亡くなられた方々の御冥福を祈って筆を置く。



【学徒動員】

- 
- 1 防空頭巾...空襲の際に落下物から頭や首筋を守るためにかぶった綿入れの頭巾。
  - 2 グラマン...アメリカの航空機メーカー。
  - 3 竹やり...竹を適当な長さに切った上で、先端部を斜めに切断した、あるいは その円周の一部だけを尖らせたもので、更に火で炙るなどして硬化処理を施した簡易の 武器。
  - 4 学徒動員...1938 年頃から国内の労働力不足を補うために、学生・生徒を軍需工場などで強制的に労働させたこと。